

国語の授業で、「郷土に伝わる民話」というテーマで調べ学習することになり、優佳さんたちの班は、民話の語り手である森山さんにインタビューをすることにした。そのインタビューの様子の一部と、それについての「問い」を一度聞き、答える。

優佳 それでは次に、民話の魅力についてお聞きします。森山さんは地域に伝わる民話の魅力とはどのようなものだと感じていますか。

森山 まず、魅力の一つは、場所や人物に関する言い伝えから、地名など土地の由来が分かるという点ですね。例えば、あなたの中学校から大きな池が見えるでしょう。

優佳 はい。あの池が民話で語られているのですか。

森山 そうです。あの池は、昔、日照りが続いたとき、誤って地上に落ちた竜の赤ちゃんを村人が助けたお礼に、竜の母親が作ってくれた池だと伝えられています。池の名前は、その言い伝えからつけられているのですよ。

優佳 全然知りませんでした。民話は、とても身近なものですね。

森山 そうです。ほかにも、みなさんがよく知っているお話も民話としてたくさん伝わっています。不思議なことに、よく似ているけれど少しずつ違うお話が全国各地で伝わっているのですよ。例えば、この地方には横着者の桃太郎のお話が伝わっています。民話は、分かりやすくいつまでも心に残るのも魅力ですね。

優佳 私も、小さい時に祖母がしてくれたお話を、今でもよく覚えてます。特に私は「浦島太郎」が好きでした。

森山 民話は、生きていく上でのいろいろな教訓が込められた話として伝わることが多いのです。例えば、あなたは「浦島太郎」のお話から、どんな教訓を感じ取りますか。

優佳 はい、乙姫との約束を破って玉手箱を開け、おじいさんになってしまふところに、「約束を守ることの大切さ」を感じます。なるほど。ただ、見方を変えれば、竜宮城から帰ると、現実の世界では長い時間が過ぎ去ってしまったということから、「過ぎ去った時間は取り戻すことができない」という教訓を感じ取ることも可能ですよね。

優佳 そうですね。一つのお話でもいろいろなとらえ方ができることも、民話の魅力だと思いますね。

森山 そう思います。民話は、様々な解釈することが可能だからこそ、時代を超えて語り継がれるのでしょうね。

森山 民話は奥深いものですね。お話を聞いて、ますます民話に興味がわいてきました。

優佳 そう言ってもらえると私もとてもうれしいです。ただ、民話の本当の魅力は、実際に語ることで分かると思いますよ。では、民話を語ることについて、一つ質問をさせていただきます。

① (1)～(4)のうちで、森山さんが、民話の魅力として述べた内容として適当でないものはどれですか。一つ答えなさい。

(1) 民話からは地名など土地の由来が分かる。

(2) 民話はこれからの理想の社会を示している。

(3) 民話は分かりやすくいつまでも心に残る。

(4) 民話は様々な解釈することが可能である。

② 森山さんは、「浦島太郎」からどのような教訓を感じ取ることが可能だと述べましたか。解答欄に合うように、七字以内で書きなさい。

③ 放送は、優佳さんが「民話を語ることについて、一つ質問をさせていただきます」と述べたところで終わりましたが、この後優佳さんは、森山さんにどんな質問をすると考えられますか。あなたが優佳さんになったつもりで、ここまでのインタビューの流れを踏まえて、適切な話し言葉で書きなさい。

3

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

たとえば、「号泣」とか「庶民」とか「妥協」といったことばについて、考えてみよう。これらは、よく使われる日本語だろう。目にしてあるいは耳にして、意味がわからないと当惑する人は、そんなにはいないはずだ。

しかし、ここに使われている漢字についてはどうだろう。「号泣」の「号」とはどんな意味か、と聞かれて、すぐに答えられる人はどれくらいいるだろうか。「庶民」の「庶」はどうだろう。「妥協」の「妥」だって、いったいどんな意味の漢字なのだろうか。

そういう目で眺めてみると、ぼくたちの身の回りには、知っているようで知らない漢字があふれていることに気づく。

漢字は仮名やアルファベットと違って、一文字一文字が意味を持っている。——これはだれもが持っている知識だろう。でも、ぼくたちは「号泣」「庶民」「妥協」などの意味を、「ことば」としては知っているけれど、「漢字」としてはよくわかっていないのではないだろうか。

そういう漢字について調べるには、どうすればよいか。

国語辞典で「号泣」の意味を調べるのは、簡単なことだ。でも、そこには「号」の意味までは書かれていない。こういった身近な漢字について、疑問を抱いてしまったら最後、漢和辞典の助けを借りなくては、それを解くことはできないのである。

そこで手始めに、「号泣」の「号」の意味を、漢和辞典で調べてみることにしよう。

「号」の意味は次のようになっている。

- ① さげぶ。(ア)大声で泣きさげぶ。(イ)とらがほえる。② よぶ。よびかける。□ ③ よびな。(ア)なまえ。名。「称号」(イ)本名・通称のほかにつけた名。「雅号」(ウ)商店や船の名の下にそえる語。
- ④ なづける。⑤ いう。世間でいいふらす。⑥ いいつけ。いいつける。さしず。命令。⑦ しるし。「記号」⑧ 数詞の下にそえて等級を示すことば。「第一号」

記述から見ると、「号泣」の場合は、「さげぶ」「大声で泣きさげぶ」という意味がぴたりきそうだ。つまり、ただ激しく涙を流すだけでは、「号泣」ではない。大声を上げながら涙を流すのが「号泣」なのであって、その「大声を上げる」の方を担っているのが「号」という漢字なのである。

ぼくたちが「号」と聞いてすぐに思い出すのは、「国道一号線」とか「アパートの二号室」といったふうな、数を表すことばの後に添えられるケースだろう。その場合の「号」は、具体的な意味がほとんどなく、いわば無機質なイメージしか持たない。しかしこの漢字は、感情をあらわにして大声を上げるといふ、きわめて人間的な意味も併せ持つていて、ぼくたちは知らず知らずのうちに、そんな「号」も用いているのである。

さて、これで「号泣」の「号」は「大声でさげぶ」という意味だということがわかったわけだが、漢和辞典の効用は、単にそれだけに止まるものではない。

「号」には「よびな」という意味もあって、「称号」や「雅号」の場合はこの意味だ、ということがわかる。また、「㉑」の場合の「号」は「しるし」という意味だ、ということもわかる。

さらに、漢和辞典では親字の解説の直後に、その漢字から始まる熟語の解説を掲載している。「号」の熟語としては、たとえばぼくたちにもなじみの深い次のようなことばが解説されている。

【号砲】 合図の鉄砲、または大砲。

【号令】 ① さしず。命令。ふれ。② 大声で命令する。

これを先の親字の意味解説と合わせて見ると、「号砲」の「号」は「さしず」「命令」という意味であろうと推測できるし、「号令」の場合には、その意味と「大声でさげぶ」という意味の両方が含まれているということがわかる。

いまぼくたちは、「号泣」の「号」の意味を調べようとして漢和辞典を開き、結果的に、いろいろな熟語での「号」の意味にまで到達したわけだ。漢字は、一文字でさまざまな意味を持っているから、さまざまな場面でさまざまな顔を見せる。漢和辞典は、それを整理して説明してくれる。だから、ぼくたちはある一つの疑問から出発しただけなのに、漢和辞典は親切にも、もっと広い回答を用意して待っていてくれるのである。

④「を調べて十を知る。——これが、漢和辞典のおもしろいところなのだ。

(注) 親字——漢和辞典で、見出しになっている漢字一字のこと。

① ——の部分⑦、④の漢字の読みを書きなさい。

② 「知っている……あふれている」とあるが、これはどういうことを表しているか。それを説明したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) よく知っている漢字でも、実は正しい読み方を理解していない場合があること。
- (2) 身の回りにあふれている漢字であるのに、正しく書くことには困難を伴うこと。
- (3) 日常的に使われることばであるのに、使われている場面を思い起こせないこと。
- (4) 意味のわかることばでも、そこに使われている漢字の意味まではわからないこと。

③ 「漢和辞典で調べてみる」とあるが、あなたが「号」を漢和辞典で調べるとしたら、「号」という字のどのような情報をもとにして、「総画索引」「音訓索引」「部首索引」のうちのどれを用いて調べるか。あなたが選んだ索引を用いるのに必要な情報を具体的に示しつつ、解答欄の書き出しに続けて一文で書きなさい。

④ 「きわめて……持つていて」とあるが、ここでの「人間的な」という表現について説明したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 直前の「無機質な」ということばと対照的に使われて、抽象的な意味で用いられる場合との違いを印象つけている。
- (2) 直後の「知らず知らず」ということばを説明して、漢字の意味を理解せずに使うことへの警告を暗に発している。
- (3) 直前の「感情をあらわに」ということばを受けて、すべての漢字には感情を表す意味があることを断定している。
- (4) 直後の「ぼくたち」ということばと結びついて、漢字が長年に渡る人間の知恵の結晶であることを強調している。

⑤ ㉑に入れるのに最も適当なことばを、文章中から抜き出して書きなさい。

⑥ 「を調べて……なのだ」とあるが、漢和辞典にこのような「おもしろいところ」があるのは、なぜだと筆者は考えているか。それを説明した次の文の□に入れるのに適当なことばを、文章中のことばを使って三十五字以内で書きなさい。

漢和辞典が、□ものであるから。

次の文章は、中学校のサッカー部に所属する「巧」に、サッカー部前監督「木暮」が、小学生の時から「巧」の親友「遼介」とともに語りかける場面である。「巧」は、新しく監督となった「草間先生」の指導に不満を持ち、練習を休んで小学生の時に所属していたサッカーチームの練習に顔を出している。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

「いい天気だなあ」
木暮は背伸びをすると、大きなあくびをした。
「ところでおまえ、ここでなにしてんの?」

そのどこか間の抜けた木暮の言い方がおかしくて、遼介は思わず笑いそうになったけれど、巧はちがった。膝に両手を置いて、思い詰めた表情で黙り込んでいた。

②「サッカー部、やめんのか?」
なにげなく木暮は問いかけた。

③「おれは……」と巧は言いかけて、言葉をすぐに呑み込んだ。
「やめれば、それで楽になるか? そうやって楽な道を一度選ぶと、次もまた楽をしたくならないか。人間って、それほど強くないぞ」

六年生のときから巧を知っている木暮の物言いは、遠慮がなかった。「いいか、おまえらは、十五歳になる。このグラウンドでサッカーをしていた頃とは、ちがう。自分の言葉にセキニンを持てるようになれ。迷っているなら、結論を急ぐな。楽になりたいからといって、決めてもいいことを安易に口に出すのは、賢明じゃないぞ。そういうのって、カッコわるいしな」

巧は息を止めているように動かなかった。
「おまえは、自分にはまったく非はない、そう信じようとしている。すべては、自分ではなく、憎たらしい草間監督のせいだと思いつつもうとしている。たしかに、あの人は難しい人かもしれない。おれもそう感じるときはある。でもそんな人間、この世の中にはいくらでもあるぞ。すべて自分とは、ちがうわけだしな。サッカーをやつていれば、どうしても矛盾を感じることもある。どうして自分の意図していることが理解されないのか、どうしておれがチームの犠牲にならなくてはならないのか、どうしておれが認められないのか……。おれも、そうだった。それでも、その矛盾を引き受けながらプレーするしかない場合もある。少なくともおれは、そう考えてサッカーを続けてきた。生きていくことと、同じように」

木暮はそこで言葉を切つてから、黙り込んでいた巧に告げた。
「逃げるな——」

その言葉を聞いて、巧はハツとした。
「その言葉は、草間先生からの伝言だそうだ。要するに、戦え、という意味だ。巧、おまえの戦う相手は、いったい誰なんだ? まず自分としっかり向き合え」

遼介は、黙つて木暮の話を聞きながら、小学生の中にまじつてサッカーをしている琢磨を眺めた。それはどう見てもサッカーを教えている姿ではなかった。ただ一緒にひとつのボールを追いかけているに過ぎなかった。峰岸が、なぜコーチを琢磨に手伝わしているのか、その理由がわかったような気がした。

「お兄ちゃん」と呼ばれている琢磨は、子供たちに囲まれながら笑っていた。その笑顔は、昔の琢磨の童顔によく似ていた。琢磨は、ここが自分のサッカーの原点だと言っていた。

「サッカーは、ひとりではできない。一緒にプレーするチームメンバーだけでなく、監督やコーチにも支えられている。対戦する相手チームだって必要だ。もちろん、ピッチに立つのは、プレーヤー自身。そのことは事実だ。でも戦っているのは、自分だけじゃない。サッカーを続けるためには、いろんな資質が求められる。その中には、チームのためにプレーするという、なくてはならないマインドがある。主張ばかりしている選手の多くは、チームメイトやコーチとうまくいかずに、早々とピッチから去ることが少なくない。プロの世界を見ていてもそうだ。それは幸せなことだとは、おれには思えない。

自己主張することは、悪いことではないよ。でも仲間の存在を忘れちゃいけない。今のチームでやるサッカーは、一生に一度だけだぞ。巧、思い出せよ、あの頃のまっさらなサッカーへの気持ちよ——」

木暮は、うつむいたままの巧をベンチに残したまま、立ち上がった。巧の肩が小刻みに震えていた。太ももに置いた両手が、今は硬く握りしめられていた。風が吹き、地面に映ったポプラの大きな樹影が揺れた。潮騒のような葉ずれの音の中に、嗚咽が聞こえた。

「巧、一緒にサッカーやろうぜ」

遼介は前を向いたままつぶやいた。

巧は強く目を閉じて、瞳を覆っていた涙を振り落とすと、言葉を絞りだすように言った。

④「おれが……、ちっちゃかった……」

(出典 はらだみずき「サッカーボーイズ15歳 約束のグラウンド」
ビブス——チームの区別のために着るベスト状の着衣。

(注) 琢磨——「巧」や「遼介」と小学校時代に同じジュニアチームでサッカーをしていた幼なじみ。現在そのチームの会長「峰岸」に頼まれコーチを手伝っている。

ピッチ——競技場。 マインド——精神。
嗚咽——しゃくり上げるようにして泣くこと。

①——の部分⑦、⑧を漢字に直して楷書で書きなさい。

②「置いて」は、五段活用動詞「置く」の連用形が「て」に続くことで活用語尾が音便になっている。同じように——の部分音便になっているものは、(1)～(5)のうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。

- (1) 読んだ (2) 探した (3) 知った
- (4) 用いた (5) 求めた

③「サッカー部、やめんのか?」とあるが、ここで「木暮」は、「巧」がこういった行動をとる理由をどういう気持ちによるものだと考えているか。それを説明した次の文の□□に入れるのに最も適当なことばを、文章中から六字で抜き出して書きなさい。

サッカー部をやめて□□という気持ち。

④「言葉をすぐに呑み込んだ」から「巧はハツとした」に至るまでの「巧」の気持ちの変化を説明したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 厳しく態度をとがめられたことに内心腹を立てていたが、「逃げるな」という言葉で自分は間違っていないと確信している。
- (2) 続けてなされる投げかけに答えあぐねていたが、「逃げるな」という言葉に何かを言い当てられたような衝撃を受けている。
- (3) 誰にも明かしていなかった本心を見透かされて驚いていたが、「逃げるな」という言葉が的外れで胸をなで下ろしている。
- (4) 予想通り頭ごなしに怒られたことにうんざりしていたが、「逃げるな」という言葉は思いもよらないもので困惑している。

⑤「おれが……、ちっちゃかった……」とあるが、ここで「巧」は、自分のどういうところを「ちっちゃかった」と表現していると考えられるか。「木暮」や「遼介」の言葉からそれを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことばを、文章中のことばを使って三十字以内で書きなさい。

自分と向き合うことをせず、□□ところ。

⑥ この文章の場面のように、言葉は、時として人の心を動かすことがあるが、あなたは、どのような言葉が人の心を動かすと考えるか。あとの条件に従って百五十文字以内で書きなさい。

- 条件
- 1 問いに対する答えが明確に伝わるように、「人の心を動かす言葉とは」という表現を必ず含めること。
 - 2 あなたの体験を事例として示したり、そう考える理由を明らかにしたりするなど論述を工夫すること。